

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320087

研究課題名（和文） 評価結果に基づき小・中学校教師とともに開発する英語授業・教材・指導法

研究課題名（英文） Developing English lessons, materials and pedagogy in collaboration with elementary and junior high school teachers, incorporating students assessment results

研究代表者

湯川 笑子（YUKAWA EMIKO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30309075

研究成果の概要（和文）：

本研究は、小学校英語カリキュラムモデルと指導法を、評価結果をとりいれつつ学校現場教師とともに協力して作ることを目的とした。他の学校とも関わりながら、主に3つの学校でカリキュラム、教授法の開発を行った。「課題とニーズの確認および目標設定」「指導案作成と指導実践」「YTK リスニングテスト、YTK スピーキングテスト、授業観察、質問紙、授業分析のうち適宜選択して効果検証」を実施するというサイクルを繰り返した。最終的に4種類のモデルを作成した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project was to create curriculum models and teaching plans for elementary school English in cooperation with teachers at each school, while taking pupils assessment results into consideration. The curricula and teaching plans were made primarily at three elementary schools though other schools were also partially involved. The following cycle was repeated in the process: “identifying the problems/needs and setting the goal”, “creating and executing teaching plans”, “evaluating the teaching practice using appropriate assessment tools/techniques out of the YTK Listening Test, the YTK Speaking Test, observation in class, questionnaires and lesson analysis. As the results four sets were created.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総計	8,100,000	2,430,000	10,530,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語、カリキュラム、指導案、評価、リスニングテスト、スピーキングテスト、コミュニケーション能力

1. 研究開始当初の背景

小学校の英語活動・教育は、2010年度以前の「総合的な学習」の枠組みでの実践時代には、「国際理解」のための活動だとされてきた。英語の知識や「スキル」の習得を目指すのではないとされることから、英語力アセスメントを含む英語教育・活動のエバリュエーションはほとんど行われていなかった。

しかし、すでにこの研究の申請時点(2007年度)で議論され、2011年度より必修となった「外国語活動」の成果について、本研究からは、児童の英語コミュニケーション力についても評価をし、その結果を生かしながら現場のニーズに合った指導を考えていく必要があると考えた。

2. 研究の目的

中学校への連携にも配慮した英語カリキュラムモデルと指導法を、評価結果をとりいれつつ小学校現場教師とともに協力して作ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、「小学校現場教師とともに」作る方法をとるため、学校が主体的に取り組める場合には支援する立場で、逆にそうした体制が組めない時はこちらがプランを提示する形でカリキュラムおよび指導案作りを進めた。基本的に、「課題とニーズの確認および目標設定」「指導案作成と授業実践」「効果検証」というサイクルを毎年繰り返し、指導内容の改善を継続した。他の公立・私立学校とも支援や協力体制をとりながらも、主に3校で開発した。

児童のコミュニケーション能力および情意面の状態を検証するツールとして、次のものを用いた。

YTK Listening Test(別名『英語力だめし』)
YTK Speaking Test((別名『Let's Talk』))
この2つのテストについては湯川・高梨・小山,2009 参照)
質問紙(中学校用、卒業時用)
授業内パフォーマンスの観察
授業分析シートによる授業分析

4. 研究成果

(1) 公立J小学校では、小学校英語活動の総仕上げとしての6年生年度末プロジェクト学習を毎年行った。上記のサイクル(成果検証には「YTK リスニングテスト(『英語力だめし』)、スピーキングプロジェクト(『Let's talk』)、質問紙調査による効果検証を実施)を繰り返し、毎年改良を加えながら、安定し

た効果の得られる6回の授業を開発した。(本研究専用のYTKホームページで公開)

このカリキュラムは、名前、好きなスポーツや教科、将来つきたい職業などの7文による自己表現とあいづち、簡単な文字の読みの学習と、絵本の読み聞かせを指導内容とし、全体で指導する部分と、大学生・大学院生のボランティア10名程度を小グループ編成での指導者とする、インタラクションの豊富なコミュニケーション活動部分からなる。そうした交流を5回の授業で経た後に、第6回として、英語話者1名に対して児童がペアで臨む会話(Let's Talk)体験をさせる。これまでに習った英語が通じる喜びを体験して小学校での英語活動を締めくくる。

計6週間にわたるこの年度末のプロジェクトのカリキュラムと指導法開発では、児童の成果アセスメントを組み合わせることで、指導の成果と達成が期待できる具体的な目標が明確になった。その結果、毎年「英語力だめし」で8割程度を得点し、英語話者と2人1組でなら3分程度英語で意思疎通できる力を全員が培えることが分かった。(成果については湯川・高梨・小山・川中(2009)、Yukawa(2012)を参照されたい。)また、スピーキングテストの検証結果にもとづいて、次の年度に指導法を一部変更(より豊富なインタラクションが生まれるように、積極的に質問をしたりあいづちをうつこと指導を強化)した結果、その成果がみられたこと(Yukawa, Koyama, and Takanashi (2010))や、指導の一部として取り入れた絵本の読み聞かせのよい効果についても実証済みである(杉本・湯川・森(2010))。

(2) 英語活動の歴史の長いM市の公立M小学校でも同様に、「課題の抽出と変更すべき単元の検討」「指導案の作成と授業実践」「授業分析シートによる検討、YTK リスニングテスト、YTK スピーキングテスト、情意面の質問紙、中学校での追跡調査」のサイクルを繰り返した。

M小学校では、コミュニケーション体験を可能にするために不可欠な練習と、自分が本当に表現したいことを表現できる状況を提供することを組み合わせたカリキュラムとして、伝統的に校外でのコミュニケーション体験と、年度末の発表会を、それぞれ2学期と3学期の軸としてカリキュラムを構成していた。したがってこの学校では、そのカリキュラムの有効性を確認し、児童がより興味をもてるテーマや活動に差し替えることで、6年間のカリキュラム、教材、指導法のすべてにわたってねらいにそって精緻化した。本研究報告書では他校でも応用可能なエッセ

スを取り出し2年に凝縮した単元案(表1参照)として公開した。

2学期(5年生の6-8単元、6年生の5-7単元)は校外でのコミュニケーション体験のプロジェクトを意識した内容とし、3学期は校内での発表会や異学年交流会を意識した学習とした。各単元についてそれぞれ充当する時間でのメインの活動案を簡単に文章で表記した。

M小学校では長年の英語活動の教授法の蓄積のため、YTKリスニングテストにおいても私立小学校を上回る成績を収めることや、スピーキングテストでも高い能力を示していることが分かっている。同学区の小学校の状態も把握できている(Koyama, Yukawa, and Takanashi, 2011)。

表1 カリキュラム案(M市の実践ベース)

5年		6年	
題材	時間数	題材	時間数
1 挨拶 自己紹介	1	1 挨拶 自己紹介	1
2 数	2	2 時刻	5
3 曜日	2	3 動物とうごきことば	3
4 月日	5	4 夏休みにしたいこと	2
5 家族	4	5 形容する	2
6 学校案内	4	6 教科	3
7 行ってみたい場所	3	7 日本の紹介	6
8 旅行者ヘインタビュー	3	8 将来の夢	3
9 野菜・食材・料理	6	9 絵本読み聞かせ	5
10 クイズ大会	5	10 show & tell	5
計	35	計	35

同学区の中学校へ進学以降の英語学習動機の変遷についても追跡して調査中である。小学校の成果を生かすべく、中学校での定期的な指導の検討会を実施しているが2011年

度末段階ではまだ作業半ばである。

(3) さらに、1私立学校では、年間25時間程度、1~6年生の全学年に対して英語の専門家による英語授業を実施することで、自分や自分の生活についての表現や読みの導入まで指導できるカリキュラムができた。研究期間中の開発の結果として、低学年(1-3年生)用1年分(2009年度実施分が中心)、高学年(4-6年生)用3年分(2009年度~2011年度実施分)の全指導案と教材を冊子化した(『小学校英語活動の可能性 2009~2011年度における京都朝鮮第3初級学校の英語指導案と教材』限定部数印刷、全319ページ)。これについても指導案、およびpptスライド教材、ワークシートを(一部公開不可能な写真などを除き)YTKホームページに掲載予定)

このうち、本研究の報告書(『報告書 小学校英語授業のカリキュラム、指導案および教材』限定部数印刷、全135頁、YTKHPにて公開)の第5章において、実施した指導単元のうち特色あるもの(「行ってみたいところ」、「世界の通貨」、「時差」、「夏休みにしたいこと」、「物語を楽しむ(Gingerbread Boy and Peach Boy)」、「つきたい職業」、「ブック・レポート(絵本読み聞かせ)」)をとりだし、単元ごとにそのメインの活動内容を解説した。この学校の6年生もYTKリスニングテストでは8割を超す正解率を示し、また、簡単な絵本を自分で読める力が育ち得ることが分かっている。(指導の方針や成果検証の結果についても本研究の報告書第5章に掲載。)

(4) これらの学校に共通する要素を盛り込んだモデルプラン1年分を、カリキュラムや指導法の背後にある方針とともに、2009年度12月に開催した公開研究会で、湯川笑子・バトラー後藤裕子(編著) 小山哲春・八島智子・中山京子・泉恵美子・田縁真弓・齋藤栄二・青木恵理・杉本義美・川中尚・松浦円代(著)『小学校英語活動必修化のためのカリキュラム、教材、教え方』公開研究会報告書平成22(2010)年3月 科研公開研究会報告書限定部数印刷、全142頁)の中で提示した。

8単元からなる年間計画表、サンプルとしての「食べ物」の単元の指導案と教材4回分、年度末のプロジェクト学習単元の指導案5回分を作成し、公開した。なお、この指導案35回分は、実際に年間週1回の英語活動を実施し始めたばかりであった関西の公立小学校1校に使用され、その後、このモデルに即して2年目の指導案も作成し、実践されている。

2011年度以降、小学校英語は必修化され、時間数もほぼ一緒になったとはいえ、今も学校の判断で低学年や中学年から英語活動を実施している学校もあれば、年間35時間の

英語授業を始めただけで指導のノウハウの蓄積がほとんどない学校もある。ALT の活用の有無、担当者の英語指導の知識や技能のレベルも多様な中で、学校の事情に配慮し、学校と共同しながら指導法や教材を改善していくという方針をとることで、おのずと、複数のカリキュラム案が生まれることとなった。指導案・教材・指導法開発に貢献した、各種効果検証結果については学术论文や学会発表として公開したが、本研究の中心である指導案、教材、指導法については、限定部数を印刷した報告書としてまとめ、可能な限り、本研究専用サイトである YTK ホームページにて公開した。ダウンロードし、使用してほしい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

E. Yukawa. Joint English education project between elementary school and university: Building up motivation of sixth graders while providing pre-service teacher training. 立命館高等教育研究. 査読有. 第 12 号. 2012. pp. 197-208.

T. Koyama, E. Yukawa. Validity of the YTK Speaking Test: Construct validation of a performance-based English speaking test for elementary school students in Japan. *Bulletin of Kyoto Notre Dame University*. 査読有. No.42. 2012. pp. 25-42.

湯川笑子・小山哲春・杉本光穂. 小学校で英語を学んだ中学 1 年生の英語学習動機と英語到達度:パイロット・スタディー. 立命館言語科学研究. 査読有. Vol.2. 2012. p. 69-89

E. Yukawa. Communication, confidence, and achievement in public school English. *Language Teacher*. 査読無. Vol.35, No.5. 2011. pp. 24-27.

E. Yukawa. Desirable teaching principles for young English learners in Japan. *Teachers Learning with Children*. 査読無. Vol.16, No.2. 2011. pp. 11-24.

E. Yukawa, T. Koyama, T. Takanashi. What does Let's Talk tell us? : Elementary school students speaking performance variability and its relation to instructional content. 児童英語教育学会紀要. 査読有. 29 号. 2010. pp. 1-15.

杉本光穂・湯川笑子・森明宏. 英語専科

教員および担任による絵本読み聞かせ. 小学校英語教育学会紀要. 査読有. 10 号. 2010. pp. 31-36.

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春・川中尚. 小学校英語活動における評価ツールの活用. 小学校英語教育学会紀要. 査読有. 9 号. 2009. pp. 55-70.

〔学会発表〕(計 9 件)

湯川笑子・仲辻秀樹・羽野豪. 小大連携による 6 年生少人数活動「立命館プロジェクト」授業と教師教育. 児童英語教育学会(JASTEC)全国大会. 2011 年 6 月 26 日. 大阪成蹊大学(大阪府)

T. Koyama, E. Yukawa, T. Takanashi. Measuring Japanese elementary school students' conversational performance in English: results and implications from a scaffolded interview test "Let's Talk". AILA2011(国際応用言語学学会). 2011 年 8 月 24 日. 北京(中華人民共和国)

E. Yukawa. Communication, confidence and achievement: Bridging the gap between elementary and junior high school English language learning. 2011 年 11 月 20 日. Plenary. JALT2011: 37th Annual International Conference on Language Teaching. 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)

E. Yukawa. How to make a smooth transition from elementary to secondary schools in Japanese English education 2011 年 11 月 20 日. Panel Discussion. JALT2011: 37th Annual International Conference on Language Teaching. 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)

E. Yukawa, T. Koyama, M. Sugimoto. An exploratory study on 7th grade students affective state in relation to their achievement. ASIA TEFL. 2010 年 8 月 6 日. Hanoi (Vietnam)

湯川笑子・小山哲春・高梨庸雄. Let's talk が語ること. 児童英語教育学会(JASTEC)関西秋季大会. 2009 年 11 月 8 日. 近畿大学(大阪府)

杉本光穂・湯川笑子・森明宏. 英語専科教員および担任による絵本読み聞かせ. 小学校英語教育学会. 2009 年 7 月 20 日. 東京学芸大学(東京都)

E. Yukawa, T. Koyama, T. Takanashi. Assessing Japanese 5th/6th graders' English communication abilities-the YTK Project. AILA2008(国際応用言語学学会). 2008 年 8 月 25 日 Essen(Germany)

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春・川中尚.
小学校英語活動における評価ツールの
活用. 小学校英語教育学会. 2008年7月
20日. ビッグパレットふくしま(福島
県)

〔図書〕(計1件)

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春. 三省堂. 小
学校英語で身につくコミュニケーション能
力. 2009. 全208p.

〔その他〕

ホームページ等

YTKプロジェクトHP

<http://www.notredame.ac.jp/~tkoyama/ytk/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

湯川 笑子 (YUKAWA EMIKO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号: 30309075

(2)研究分担者

小山 哲春 (KOYAMA TETSUHARU)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学
部・准教授

研究者番号: 60367977

山岡 憲史 (YAMAOKA KENJI)

(2009-2010年のみ)

立命館大学・教育開発推進機構・教授

研究者番号: 90469114